SHINGON HORONIC

色 は 匂 へ ど

IRO WA NIO E DO

特集　チベットの光と影

PHOTO SHU FUJIWARA

好評連載　弘法大師の芸術論

西宮紘

平成十二年長月一日発行　巻十六

ダライラマの帰りを待つ　チベットポタラ宮

PHOTO　TATSUKI

経験と体験の違い

日本人はなぜ英語が話せないかと聞かれたので
日本人は英語の学習体験は
中学、高校、大学と約十年あっても
英語の学習経験が無いからでしょうと答えました
体験の数が多くてもそれを自らのものにするには
経験の深さが必要です
仏教では瞑想という素晴らしい法よって
お釈迦様の悟りの心を経験して学びます

編集主幹　阿部龍樹

特集 チベットの光と影

3

お釈迦さまの真理の花束

13

現代の道しるべ

15

新刊の紹介

弘法大師墨蹟聚集の三つの新しさ　竹内信夫

9

弘法大師の芸術論　西宮紘

17

『死を見つめる心』　ダライラマ　春秋社

『宇宙を呑む』　杉浦康平　講談社

18

『茶花づくし』　講談社

特集　チベットの光と影

イスラムに追われインドからヒマラヤを越えた人々は
中国に追われ再びヒマラヤを越えなければならなかった

チベット寺院の内部は曼荼羅や尊蔵で埋め尽くされる

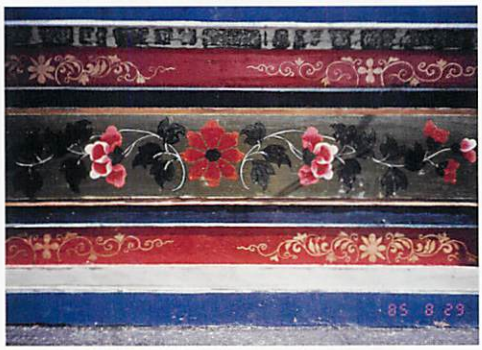
天空の国チベット

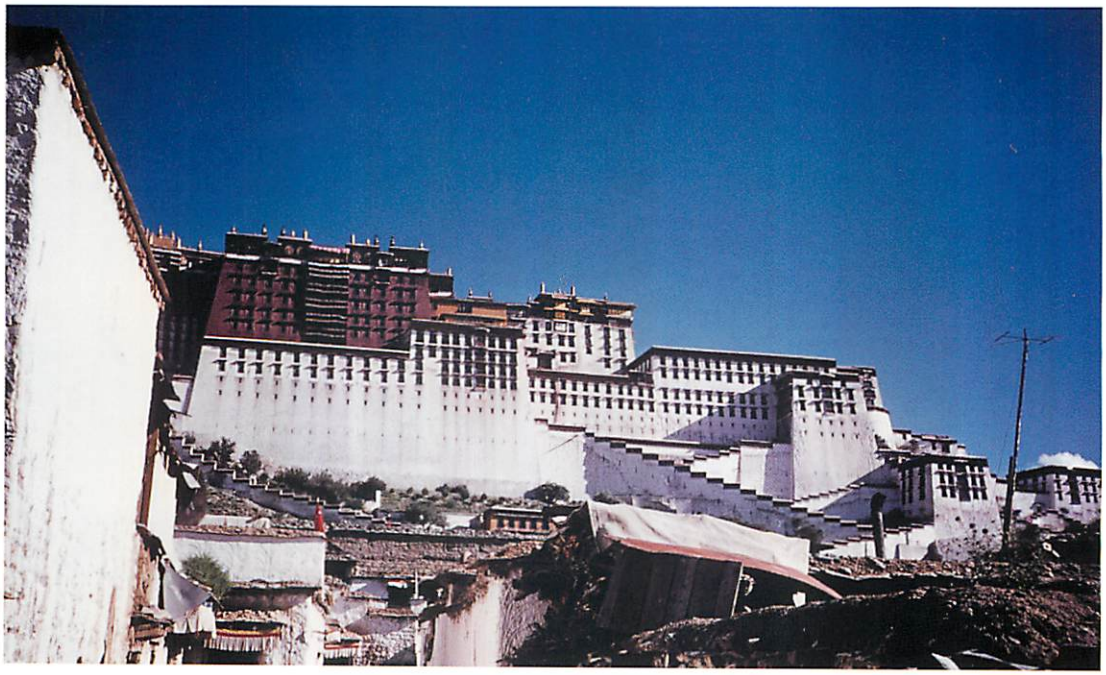
チベットの首都ラサは海抜三千三百メートル。この高地に密教王国が長い歴史を刻み続けている。

中国の成都から空路チベットに入る。チベットは雪に深く覆われた国という印象があるが雪は年間を通してほとんど降らず積もることはない。標高三千六百メートルまでは耕作が可能で麦や豆、トウモロコシ、ソバ、とうがらしなどが栽培され、花も多くひまわりやバラ、蓮やパンジーなど温暖な土地に生育する花も見ることが出来る。

耕作が不可能な高地ではヤクを放牧している。ヤクから取れる乳からはバターが造られバター茶や灯明の燃料など様々な形で使われる。

鳥の種類も豊富で鳥葬のときは禿鷹が活躍する。





歴代のダライラマが住み、またその遺骸が眠るポタラ宮殿。

チベットの歴史

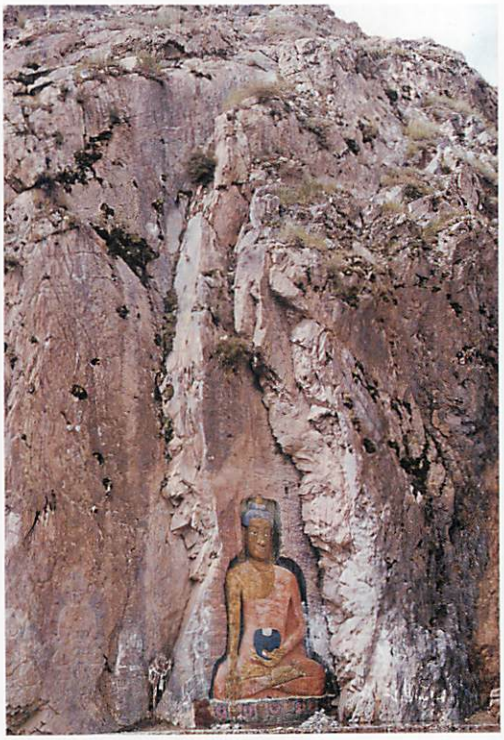
チベットの歴史は古い

チベット人の歴史は古く第九代の王プデ・クンギャルは紀元前一四〇年から八五年に在位していた。中国の前漢武帝の時代。チベット王家の初祖はインドマガタ国の高貴な家にまで遡るという。

七世紀初頭、チベットに現れた第三十二世ソンチェン・ガンポ王はちょうど日本の聖徳太子のように十条の道徳律と十六条の掟を起草した。

そして腹心トミサンボーダと十六名の若者をインドに使わし文字を導入する。トミサンボーダはならったブラウフミー文字からチベット文字を考案した。

ソンチェン・ガンポ王はまた唐の大宗にの文成公主との結婚を申し込み認めさせ、またネパールの王妃ベルサとも婚姻を結んだ。二人の后はそれぞれ仏像を持してきた。とくにネパール王妃が携えてきたアシュク如来はチベットの人々から大きな信仰を集めている。（唐から后を迎えられるのはチベットにそれだけの力がある国だからだ）



空港からラサに向かう途中に見えた大きな間崖仏

チベットの宗教

古代のチベットにはボン教という宗教があったが七世紀以降インドやネパールから仏教がもたらされ、とくに八世紀に密教僧パドマサンバヴァによって正式に仏教が伝えられた。そして七人のチベット青年が比丘戒を受け、また大乗の多くの密教経典をチベット語に翻訳した。

そしてイスラムがインドの仏教に壊滅的打撃を与えた。その難を逃れた人々が険しい山々を越えてチベットの地に救いを求めた。

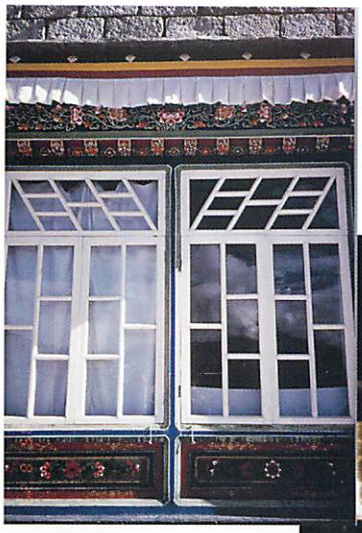
しかし一九五九年中国軍の侵略により、チベットの仏教は再びヒマラヤを越えなければならなかった。

今でもチベットではチベット語の教育、チベット人同士の結婚は許されず、かつて数千人の僧が法を守った寺院も今ではわずか数十人の僧が町の雑役夫などをしながら糊口をしのいでいる。

そして今年の春カルマパ十七世がインドへ亡命した。

過酷な宗教弾圧と占領政策への無言の抗議として。

住宅の窓には美しい花が彩色されている



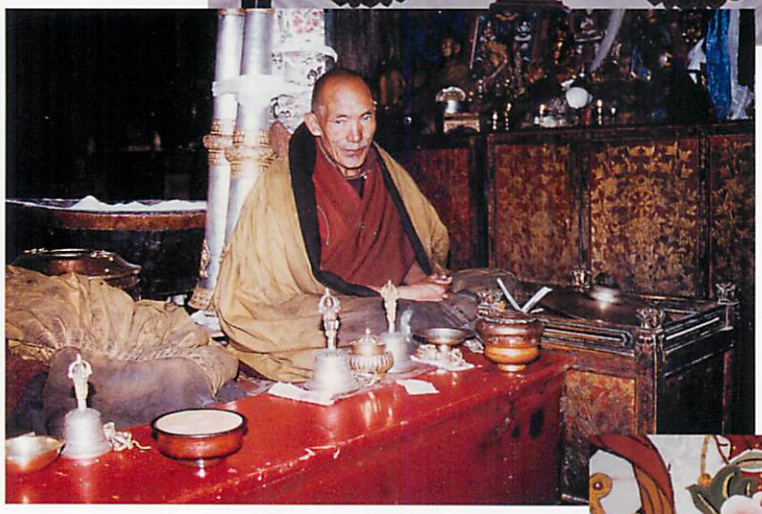
寺院に並ぶマニ車。一つ一つに真言が刻まれ一回回すと真言を唱えた功徳がある。

手に数珠を持ち巡礼する人々。

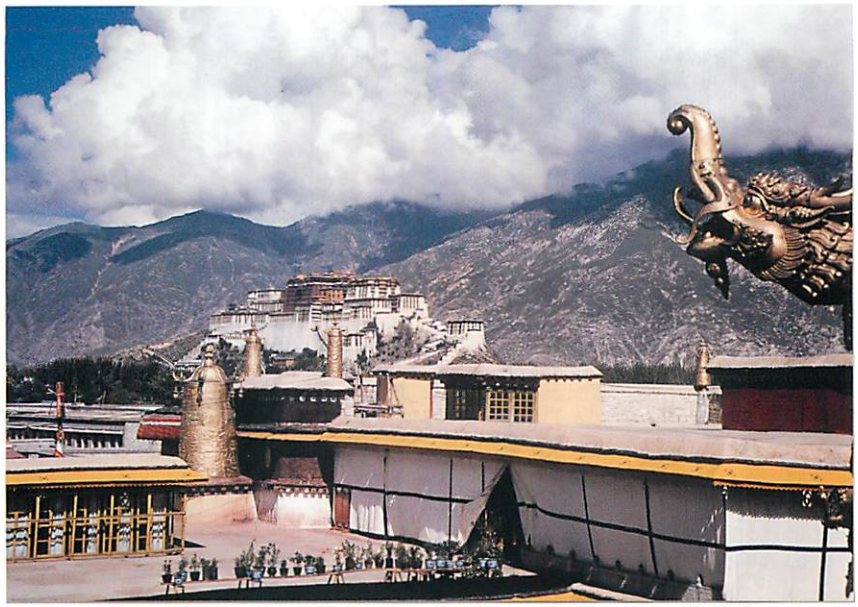
市場には様々な商品がならぶ。

面白い時計屋の看板。

チベットでは大きな幔幕やテントにも美しい刺繍をほどこす



チベットでは法要に列座する僧侶の前に器がおかれ
若い僧がバター茶と麦粉菓子を配る



チベット密教と真言密教の優劣を聞かれることがあります。
空海密教ほど洗練された美しい体系は地球の思想史上唯一最高です。

日光とポタラと観音浄土

日光山輪能寺と東照宮はこのたび世界遺産に登録された。日光山はかつて二荒山（ふたあらさん）といった。フタアラは観音の浄土ふだらく浄土がなまったものでやがて二荒のよみを「ふたあら」から「にこう」とそのまま読むようになり、そして日光の字を当てるようになった。
チベットの法王の宮殿ポタラも同じ観音菩薩の浄土フダラクからきている。
古い地名に潜む仏教の大きな影響が感じられる。
ちなみにこの日光山を開いた勝道上人の業績を讃えた碑文を弘法大師がお書きになり、日本の紀行文の最初と位置づけられている。

チベットの男女抱擁図像

チベットには多くの男女抱擁の仏菩薩像があり『愛欲を肯定するチベット密教』といった捉え方で興味本位な報道がされたりしがちだ。
菩薩は大いなる智慧を父とし、限りなく深い慈悲を母として生まれる。
と仏典に書かれている。
菩薩が発生する原点を生命の生まれる原点と重ね合わせもっとも原初的な人々にもわかりやすい図像を示すことで、より深い教えに導くためのものだ。

チベットの人々はこの世での幸も不幸もすべて己の過去世の因果応報ととらえているので、己の人生に満足していて情に溢れ、正直で暖かくいつも穏やかでよりよい来世のため真言を唱え、五体投地をし、徳を積むことを至上の課題にしている。

墨蹟聚集の三つの新しさ　弘法大師墨蹟集聚の全貌

「未だ学ばざるを学ぶ」の記録

東京大学　竹内信夫

第一の新しさ（一）―梵字への注目

今回、『弘法大師墨跡聚集』第二帙として復刻されるのは、主として、大師真跡とされている部分です。しかし、そのほかに、今回は特に『三十帖策子』に含まれる梵字に注目し、大師真跡はもちろん、そうでないものも併せて、『三十帖策子』の中に見出される梵字はすべて復刻されています。これは、『三十帖策子』が大師の長安での学問と受法の足跡であるとする考えから、さらには梵字学習がその足跡のなかで重要な位置を占めているとする判断から決定された編集方針に基づいています。

これは新機軸というべきもので、大師の墨跡集を銘打った本としては初めての試みと言ってよいでしょう。同時代の梵字の字形、悉曇学の状況についての研究にも大いに資するものと考えます。

『三十帖策子』のなかに書かれている梵字の多くは、実は、大師の手跡である可能性が高いのですが、従来の「弘法大師真跡集」の類には、すべてが収載されるということはありませんでした。それは、大師の書が、漢字の書を中心に研究されてきたためでもあります。書の歴史から、梵字は排除されていました。十七世紀、日本近世の文芸復興期以降には、梵字が書として独自の位置を占めるようになり、慈雲尊者という高峰を経て、現在に至る独自の系譜を形作っています。しかし、そのなかにおいても、『三十帖策子』の梵字書が、重要かつ貴重な大師墨跡であるという認識はあまりなかったように思われます。

この点に、『墨跡聚集』第二帙の新しさがあると思われます。唐の写経生の書いた怪しげな梵字なども復刻されていますが、それら写経生の梵字に大師の梵字書を対比して見るとき、梵字というものに対する大師の主張を直接に感じ取ることができるように思われます。

『御請来目録』のなかで、大師が梵字について書かれた言葉、「源を存するの意、それここに在るか」（源である梵字をそのまま用いるということの意味はここにあるのだ）という言葉も、『三十帖策子』の梵書を前にするとき、深い真実性をもって私たちに立ち現れてくるように感じられます。

第二の新しさ（二）―カラー復元の試み

『墨跡聚集』は、これも初めての試みとして、すべてをカラーで再現するという大方針の元に編集されています。これは責任幹事の任を負っておられる満願寺貫首阿部龍文僧正の大勇断によってなされた決定です。大師の墨跡、大師に深く関わる書跡が、すべて、今回新たにカラー撮影され、そのカラー原版から影印されています。大師墨跡の影印史において、まさに画期的な出来事と言ってよいでしょう。

すべてがカラー原版から、と言いましたが、残念ながら例外があります。今回配本の『三十帖策子』もその例外の一つです。もちろん、『三十帖策子』についても新たにカラー撮影を、というのが当初の私たちの希望でした。しかし、現在、京都国立博物館に寄託され、その保管庫に大切に保管されている『三十帖策子』原本の状態は、新たな撮影を許すものではありませんでした。残念ではあったのですが、大切な原本を今以上に傷つけることはやはりしてはならないことでした（傷みが激しいのは表紙装丁ですが、一日も早い修復が望まれます）。

そこで阿部僧正の決断されたことは、すでに存在するモノクロームのコロタイプ原版か

原寸大で美しく甦った弘法大師在唐中の書

らのカラー復元という大胆な方針でした。昭和五二年に法蔵館からきわめて精巧なコロタイプ版の複製本が刊行されました。現在では、これが『三十帖策子』研究の標準的な版本として用いられています。今回のカラー復元の原版となったのは、便利堂に保存されていたそのときのコロタイプ印刷用の写真原版です。

便利堂の持てる技術力を総動員して、コロタイプ原版からのカラー復元が行われました。十年ほど前から『三十帖策子』の本文、特に梵字テクストの研究を始めていた私は、今回のカラー復元版『三十帖策子』の編集から作成まで、阿部龍文僧正そして補佐役の真保龍敞僧正のお手伝いをさせて頂きながら、ほとんどすべてのプロセスにわたって参与させて頂きました。まことに不思議な、と同時に有り難い縁と申し上げるほかはありません。

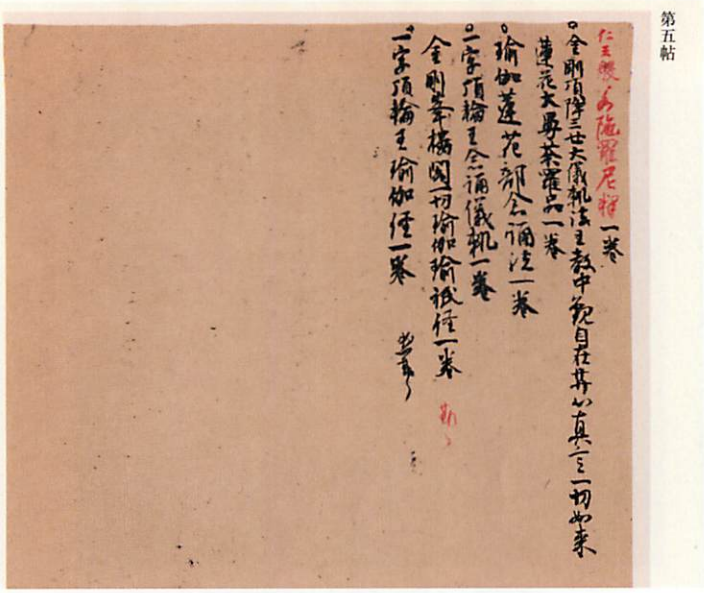
料紙、墨書の全体にわたる基本的なカラー復元作業は、便利堂の技術陣が、全力投入して実現してくれました。ほとんどカラー原版から印刷したかと思われるほどのすばらしい出来栄えです。今までのモノクロのコロタイプの影印を見なれた眼には、『三十帖策子』が今新しく蘇生したかと思われました。『三十帖策子』がこれほどのリアリティを以って復刻されたことはありません。確かに一葉か二葉、複製本の口絵カラーグラビアとしてならば、ないわけではありません。しかし、全ての頁が、このように鮮やかな色彩の世界に姿を再現されたことはありませんでした。校正刷りが出来上がって、それを初めて拝見したときの驚きと、そして喜びは今でも忘れられません。

第三帙の新しさ（三）―朱点・朱字の復元

しかしながら、一つ、大きな困難が私たちを待ちうけておりました。それは、随所に用いられている朱をどのように復元するか、という問題でした。モノクロのコロタイプ版から正しく墨書と朱書を区別することは、まったくとは言わないまでも、ほとんど不可能に近いことです。

幸いなことに、法蔵館複製本を作成する時に作られた朱点、朱字等の調査記録（法蔵館複製本の「解説」に所載）と、今まで部分的に刊行された『三十帖策子』のカラー写真が私たちの助けとなりました。しかし、調査記録は、どの字が朱字で、どの点が朱点であるかまでは記録していません。わずかに各帖ごとに、朱点が加えられた頁の数、朱書された文字の数を記録するにすぎません。『三十帖策子』のカラー写真は数えるほどしかありません。

『弘法大師墨蹟聚集ー書の曼荼羅世界ー』の申し込み　お申込お問い合わせは
電話０３－３７０５－７２３８　ファクシミリ０３－３７０３－４９７９



第五帖

仁和寺　蔵

弘法大師自筆の首帖目録
「瑜祇経」に朱で勘了の文字が

一つ一つのケースについて、朱か墨かを判定しながら、粘り強く作業を進めました。それは砂のなかから砕かれた宝石の断片を探し出すのにも似た作業でした。しかし、その間に、今までは注意されなかった事実に気づかされるという、思わぬ収穫もありました。詳細については別冊で刊行される解題に述べる予定ですので、ここでは省略しますが、朱の書き入れというものが、重要な意味を持っているらしいということは、少なくとも私にとっては、予想外の大きな発見でした。

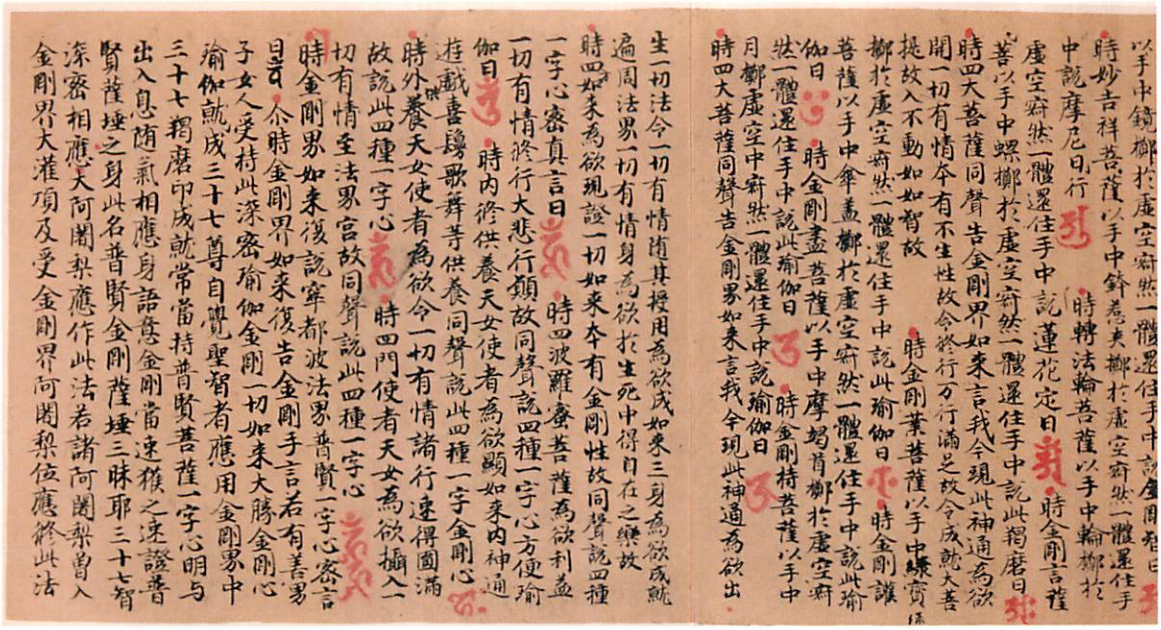
例えば、第五帖。真言宗にとっては大変重要な経典である「瑜祇経」（具名は、「金剛峯楼閣瑜伽瑜祇経」）の写本が収められています。本文は唐写経生の筆ですが、それには、最初から終わりまで、丁寧に、朱点が加えられております。また、帖首にはこの帖の目録（いわゆる「帖首目録」）が大師の自筆で書かれています。そこには、もちろん、「瑜祇経」も記載されているのですが、その題目の下に、同じく朱で「勘了」（本文の校勘が終わった、の意）と書きこまれています。

面白いのは、「瑜祇経」本文の首題の下にも、同じ朱文字で「勘了」と書かれているのです。実際には、下の部分が数ミリ程度裁断されていますので、「了」の字は起筆部分だけがわずかに残っているだけですが、「勘」の字ははっきりと読むことができます。「帖首目録」が大師の筆であることは間違いないことですから、この「勘」の朱字も、また、大師の真跡であるとしなければなりません。

また、この「瑜祇経」には随所に朱点（句点、鉤点）が施されて、入念に読み込まれた跡が歴然と残っています。この朱も大師のもの（今のところ私はそう考えています）とすれば、そこには大師に「瑜祇経」の読みの明白な跡があるのだということになりましょう。

「瑜祇経」本文の写経は大師の筆ではありません。しかし、その朱による書きこみ、加点が、私の推測するとおり、大師のものであるとすれば、私たちは、そこに「瑜祇経」本文の一字一字を読み進める大師の目と、朱で点を打ち、誤字を訂正し、さらには梵字を書きこんで行く大師の筆の動きを追うことができるのです。そのことに気づいたとき、この第五帖の「瑜祇経」が、私の目には、今までにない輝きを持ち始めました。

しかし、この「瑜祇経」の朱書、朱点を墨書、墨点から判別することは至難の業でした。どんなにコロタイプの影印をルーペで覗き込み、目で見るわずかな色調の差に本文の意味を勘案しながら判別するのです。最終的



仁和寺　蔵

弘法大師自筆で朱の梵字が丁寧に書き込まれている

な判定を諦めるか、とも思ったのですが、そうすれば必ずや後悔することになるという思いを抑え込むことはできませんでした。

意を決して、仁和寺の学芸員の麻川さんに事情を話し、直接見ることがかなわぬならば、京都国立博物館のどなたかを通じて、朱の確認をさせて頂けないかとお願いしました。気持ちが通じたのか、あるいは大師の御助力があったのか、私の申し出は仁和寺の了承されるところとなりました。もう一つの幸運は、京都国立博物館の赤尾栄慶先生と種智院大学のある研究会でお会いしていたということでした。赤尾先生に事情を話し、仁和寺さんの了承も頂いていると申し上げました。赤尾先生、やってみましょう、というご返事を頂いたとき、私は内心には大きな安堵がありました。

今回のカラー復元にあたって、この第五帖の「瑜祇経」と、第二十九帖の一部を除けば、大部分の朱の復元は私の推定に基づいています。しかし、「瑜祇経」だけは、全体にわたって、赤尾先生という信頼できる方の目を通じて確認された復元です。苦労は大きかったのですが、「瑜祇経」の朱の書きこみを、このような形でほぼ完璧に復元することができたのは、私の大きな喜びであり、また大きな誇りです。

『三十帖策子』との新しい出会い

今かえりみれば、この大きな喜びは、阿部僧正の御誓願、またそれを補佐された真保僧正のお助けがあってこそ、私のものとなったわけです。お二人の大いなる御報恩に深く感謝申し上げます。また、仁和寺関係者の皆様、そしてお忙しい中、細心の注意を要求される作業を引き受けてくださった赤尾栄慶先生にも、この場を借りて、深く感謝申し上げます。そして、何よりも、この『墨跡聚集』の第二回配本を手にするすべての皆様が、カラー復元されたこの『三十帖策子』から、大師の書のいっそう大きな魅力を感じ取られんことを願っております。『三十帖策子』との新しい出会いがここから始まるとすれば、私の喜び、これに過ぎるものはありません。

『三十帖策子』との新しい出会いとは、そのままに、大師との新しい出会いになる、私はそれを心から願っております。

合掌。

第二回配本の『三十帖策子』が手元に届いたとき、宝前に飾ってから繙きました。宗祖大師の在唐の短日時の救法の日々の凄さ、厳しさ、速さが伝わってきて感動しました。もう決して眼にすることが出来ないと思っていた『三十帖策子』が復刻されしかもカラーで朱書・朱点まで再現された。真保先生、竹内先生の業績は時が経つほど意味の大きさが深く広がります。心から感謝いたします。

お釈迦さまの真理の花束

Should one see a wise man,who,as if indicating a treasure points out falts and reproves,let one associate with such a wize person:;it will be better, not waorse,for him who such a person follows.

Let him advise,instruct, and shield one from evil.

A delight is he to the good, a vexation to the wicked.

深観善悪
心知畏忌
畏而不犯
終吉無憂
故世有福
念思紹行
善至其願
福録転勝

昼夜当精進
牢持於禁戒
為善友所敬
悪友所不念

財宝の在処を　告げる人のごとく
己が罪を示し　過ちを教えさとす
智ある人に遭はば
かかる賢者に仕えるべし
かかる人に仕えるならば
善きことありて
悪しきことなし
いましめよ
教えさとせ
なすべからざるを
遠くさけよ
かかる人は
悪しきひとには
憎まるるとも
善き人には
愛せらるべし

PHOTO&TEXT　SHU　FUJIWARA

現代の道しるべ

いつかの大学生が訪ねてきた、「今度留学するけど、向こうは宗教を聞いてきます。でも僕の宗教ってなんでしょう。」

「なんだろうね。」

「正月の初詣は鎌倉八幡宮だし、家の法事は浄土宗だし、姉は教会で結婚式をして、最近僕は空海にすごく惹かれるけど。でもやっぱり日本はいい加減なのかな。」

「ぜんぜん。一神教じゃないんだから。」

「多神教ということ。」

「多神教でもないよね。すべてを包み込んで排除しない、大きな器だね。たとえばイスラム教は一神教でしょ。イスラム教からみると宗教とは天から啓示を受けた教えに限るわけで、逆に天啓を標榜していればすべて同じ宗教と考えているんだ。」

「そうですか、イスラム教って一番過激で一番排他的で、よく『右手にコーラン左手に剣』て言いませんか。」

「少し誤解があるね。キリスト教より寛容だよ。ゾロアスターでさえ天啓を標榜するので同じ宗教として認めるし、キリスト教の小さな異端はヨーロッパで激しい迫害の嵐の中を生き延びようやくエジプトの中に安住の地をえて今は安全暮らしているよ。」

「イスラム教とキリスト教、イメージが逆ですけど。」

「それはプロパガンダの違いで世界の主要先進国が日本以外すべてキリスト教だからだよ。世界的なジェノサイド（民族の抹殺）はキリスト教の名のもとにおこなわれてきたでしょ。」

「本当ですか。」

「たとえばニュージーランド、史上最大の殺戮が先住民に行われたし。」

「そんなことが許されないですよね。」

「でも旧約聖書のヨシュア記には選ばれた民（イスラエル）に神の啓示があって、先住民の村の抹殺をしその土地を奪いそこに住むことを記してある。」

「キリスト教は平等を説いてませんか。」

「神のもとでの平等をね。つまりキリスト教の神と契約したものは、その神のもとに平等に扱うけど、契約してないものは平等の対象にはならないんだ、だから神の名の下に殺戮もあり得るわけだ。」

「仏教には平等って言葉があるんですか。」

「あるよ、宇治の平等院鳳凰堂とお寺の名前にもなってるよ。仏教ではこの宇宙の一切万物が仏の姿なんだ。だからいかなるものにも仏の命が宿っていて、本質的に悟ってるという考えなんだ。と同時に違いもありのままに見ることも仏教の大切な教えなんだ。たとえば深い森には大木もあれば下草も沢山ある。お互いに生かし生かされあう共生関係にあるわけだ。でも生きる条件は平等ではない。下草から見れば大木はいつも太陽の光を一杯にうけて羨ましい、大木から見れば下草はいつも自分たちのしたで台風や雷雨からも守られて羨ましいと思うかもしれない。でもかりに下草たちに大木と同じ太陽を当てたらどうだろう。光が強すぎて程なく下草は枯れてしまうでしょ。逆に大木は下草と同じ太陽の光ではやはり枯れてしまうし。」

「それで僕の宗教はなにになるんですか」

「何でもいいじゃない。仏教でも神道でも好きなのを書けば。それに日本人は無信仰でも無宗教でもないよ。このあいだ来ていたイタリア人は『日本は無宗教な国と聞いてきたけどとんでもないね。どんなお家にも立派なチャペルがあって。またその作りが凄い造形なんだ』と興奮気味に話すのでチャペルなんか無いよと思っていたらお仏壇のことなんだ。しかも家によっては神棚もあるから凄いって。だから好きな宗教を書いたら。」

「そんないい加減じゃ困るんですよ。なんで日本人は初詣は神道で法事や葬式は仏教で結婚式は教会で・・。そこを説明してくれないと。」

「日本は一神教じゃないんだから。一神教という概念がないというか、だからキリスト教だって新しく仲間に加わったちょっとおしゃれなファッションの結婚式ができる新しい神様、それぐらいの意識しかないんだよ。キリスト教の神父さんが聞いたら怒るかもしれないけど、本当にキリスト教を広めようと思ったら、本当の信者以外の結婚式はすぐやめた方がいいよね。」
「てことは仏教から見るとキリスト教も一仏教の宗派とうこと？」
「宗派には別な意味でなり得ないけど、僕の知っているお寺で今すばらしい曼荼羅を作られていて、その片隅には十字架を入れるって。」
「そうか、一神教の物差しで曼荼羅を語るのは30センチにものさしで球体をはかるようなものなんだ。」
「少なくとも一神教の人にはまだ曼荼羅といった概念はわかりにくいし、割り切れないかもしれないね。そういえば新教育要綱で円周率は3・14から3にするらしいね。でも3では正六角形と同じになって、割り切れてしまうね。円は割り切れないし、円周率は無限に続くことを教えてこそ教育だし割り切れないところに日本は美を感じたり切なさを感じるのにね。
とくに日本の音楽や庭は左右対称にしないでわざとはずして音を出したり響かせたり、庭も石を置くのでも微妙にずらして緊張感を持たせたり逆に和ませたり、驚きもあったりするね。その微妙な間を楽しんだりして。」
「日本の音楽って和太鼓、三味線ですか。祭り囃子とか、聞く機会も少ないし、まして触ったこともないし。」
「平成十四年から確か小学校でも日本の伝統音楽を取り入れる。」
「それにしても今の子供達はすぐ切れますね。」
「大人はもっと切れてると思うよ。大人がちゃんとしないとね。良い大人が町からも社会からも居なくなったね。これからは良い大人になろうというキャンペーンも必要だね」
「良い大人の条件てなんですか。」
「毅然としていること、スタイルをもってること、人をしかれること、人をほめられること。」
「日本にいますかそんな人。」
「居て欲しいね、かつては白州次郎ていう人が居たけどな。吉田茂首相の補佐官として占領軍と渡り合ってね、イギリス英語がうまくてアメリカの将校に英語をほめられると『あなたももう少しがんばれば上手くなりますよ。』といったり、あるゴルフ場の理事長をしているときは現役の総理二人も叱ったそうだよ。晩年は確か大沢商会の役員をしていていつもスポーツカーで颯爽と会社にきていたって。」
「そうですね。今はあんな大人になりたいって思わせる人も少ないし。あの人みたいにお金持ちになりたいという人はいても。」
「そうだね、経済は経世済民つまり世の中を経営して人を救うという意味なのに経済と短く言うと済民が見えないね。仁徳天皇の陵墓前方後円墳は日本最大だけど、文字どおり仁徳の人だったんだ。人々の家の竈から煙が上がらないのをみて、民が苦しんでいることを知って、なんと三年も税を取らない。そのため御所の瓦は落ち塀は崩れても。」
「選挙が終わってもう増税を言い出す今の政治家とは大違いですね。」
「君は政治家志望だっけ。」
「まず経済界、成功したら政治家かな。」
それから話題は政治と宗教の話しから憲法で政教分離を謳っているのは北朝鮮とモンゴルと日本しかない話しや、『分をわきまえる』ということから江戸時代の経世済民の達人山片蟠桃（ばんとう）のはなしへと広がった。

弘法大師の芸術論五

精神文化史　研究家　西宮　紘

お大師様の時代のおいて、文章を作るということがどういうことであったかを知っておく必要がある。文章を作るに当たって、人は、古人のさまざまな文章をできるだけ記憶しておき、そこからさまざまな語句や文章の構成法を取り出し、一種のモザイクのように組み上げていくのが、当時の文章の作り方であったのである。いわば、古人の文章ないしは正確な典故の上に思いを述べるのである。漢詩文などの場合は、特にそうであった。日本的な和歌にしても枕詞、序詞、本歌取りなど、やはり古人の歌・典故を下地にして歌われたのであり、古人の歌をできるだけ多く知っているのが、優れた和歌を作り得る要件でさえあったのである。

ただ、どういう典故を用いるか、そしてこの組み立て方にその人の才能というものが試されたのである。だから、お大師様の文章が古人の語句の組み合わせであったり、引用であったりしたとしても、そこにお大師様の思想なり思いが表現されていないというのではないのである。

『文鏡秘府論』南巻「論文意」も、その意味では、かなりの長文の引用とはいえ、王昌齢や皎然の文章を通じて、お大師様の考えを打ち出していることに変わりはないのである。とはいえ、引用の際のごくわずかな語句の異同の中にこそ、微妙な思考・感性の差異が現れてくるとも言えよう。こうした発想は、漢詩文の場合、かなり徹底されたものであり、特に技法を重んずる唐人の整斉謹厳なまでの堅苦しさがそれを要求していたという背景も考えられよう。

いずれにせよ、「凡そ詩は、惟だ古に敵するを以て上と為し、古を写すを以て能と為さず」とあるように、古人の作に肩を並べれば立派であるが、古人の作を模倣するというのはよくないのである。先に挙げた上表文の中でも、「又詩を作る者、古の体（真の心）を学ぶるを以て妙とす、古の詩を写すを以て能しとせず。書も古の意に擬するを以て善しとする。古の跡（書の字体）に似たるを以て巧なりとせず」としている。

お大師様は、若かりし頃から、『文選』を学ばれ、その内容については、すみずみまで記憶されており、ほとんど無意識化されておられるほどであったろうと考えられるのであるが、その巻二九「古詩十九首」其一に、

行きて行きて重ねて行き行き
君と生きながら別離す

という二句があるが、こうした古人の詩句が積み重なって、『秘蔵宝鑰』巻頭の詩の次のような句が生み出されたのであろう。

悠悠たり悠悠たり太だ悠悠たり

そして、このリズムが何回か繰り返されて素晴らしい次の終二句へと収斂していく。

生れ生れ生れ生れて生の始めに暗く
死に死に死に死んで死の終りに冥し

ここにはお大師様独特の、古人をも凌駕する詩の境地がある。この「生れ生れ生れ生れて」「死に死に死に死んで」は、時間と空間の広がりの中に、宇宙の生成と消滅の限りなさ、宇宙の始源の暗さ、その終末の冥さという無明にさすらう我々現代人、あるいは未来人をも射程に入れている。

西宮　紘　1941年生まれ　京都大学理学部物理学科卒業　著書『空海　火輪の時空』

新刊の紹介

『宇宙を呑む』
杉浦康平　講談社

著者は東京芸大で吉田五十八氏について建築を学び、その後、グラフィックデザインや本のデザイン等へ全く新しい世界を展開している。
写真家石元泰博氏が撮影した東寺伝真言院曼荼羅を全く新しい形の本に仕上げた力量は他の追随をゆるさない。

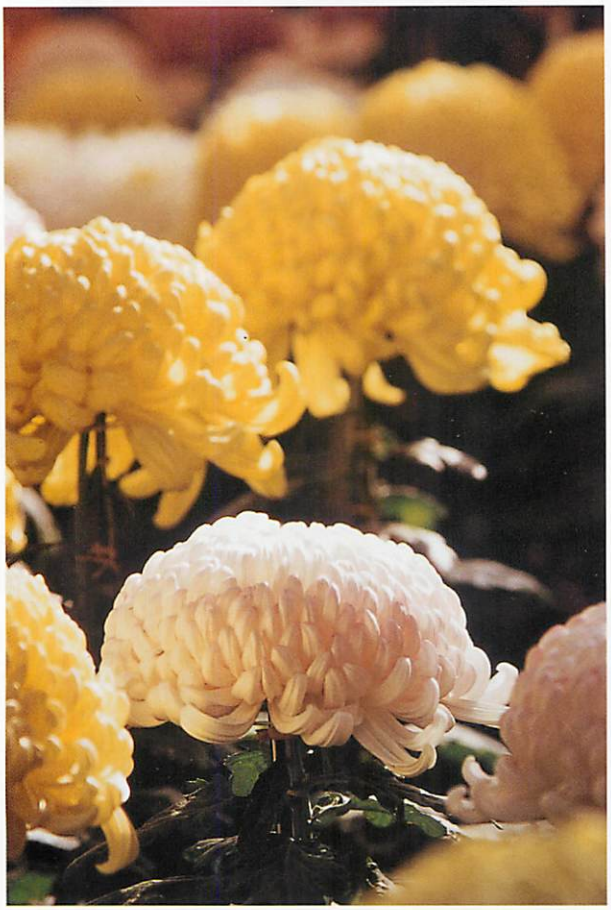
曼荼羅だけでなく「かたち」「アジアの造形」などにも詳しくそれらを独特の目に見える言語に置き換えていくビジュアルコミニュケーションは素晴らしい。
この本は著者が永年追い続けたアジアの宇宙をまさに著者自身が呑み込んだ会心の作。
呑み込まれた宇宙はインドのビシュヌやブラフマン、聖獣、ヨーガ行者とくに道教の気功法「周天法」を見える形に描き出した第八章、第九賞は氏の真骨頂。

『茶花づくし』
講談社

利休は『花は野にあるように』と説いたが今、野にある花の風情を知るものが少なくなった。
まして茶花の種類や名前をその季節のあわせて思い生けられる人はさらに少ない。
本書は茶花を網羅し、茶人から文化人様々な人々に各人各様の好みに任せて花を生けさせてる。
はたして利休が説いたように生けられているものもあれば、全く大胆な試みもある。
題名の通り茶花を尽くしていて、炉編、風炉編と上下二巻あるので四季を通じて座右で楽しめる。

『死を見つめる心』
ダライラマ　春秋社

戦後多くのものを私たちは失った。その最も大きなものの一つがこの本の題名だろう。
『死を慌てず、
静かに迎えるには、
それまでどのように、
生きてきたかが、
大きく関係します。
意味ある人生を送れば送るほど、
死に際して思い残すことが
少なくなるからです。
すなわち死が近づいたときの心境は
それまでの生き方によって
左右されるのです。』本書より
他に『生き方の探求』
『他者とともに生きる』との
ダライラマ三部作。



次回発行は12月1日予定

特集　弘法大師の社会事業1　満濃池

Editor RYUJU ABE　Art Director and Photographer/SHU FUJIWARA　Spescial Contributors/RYUICHI ABE KO FUJIWARA
Editorial Staff/ MIWA SAMURO KOJI TOKUMARU REIKO ONUKI KAZUFUMI MOTOYAMA IIDA SHUNJI
HOMEPAGE DESIGN MASAAKI OKA HIROYUKI HANAWA Making Mechanic SANMITUSHA+BENRIDO Printing KORINKAKU
PUBLISHER RYUBUN ABE　EDITOR RYUJU ABE　EDITORIAL OFFICE MANGANJI SHUGEISHUCHIIN S.H.C

〒158　東京都世田谷区等々力3-15-1　電話03-3705-1622　ファクシミリ03-3703-4979

Shingon Horonic Irowanioedo 第一巻第十六号　平成十二年長月一日発行